

## 質的インタビュー調査の再概念化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 勇 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/1906">http://hdl.handle.net/10098/1906</a>

# 質的インタビュー調査の再概念化

伊 藤 勇

## 1 序論

### 1-1 インタビュー調査の現状と課題

現代の社会調査においてインタビュー<sup>(1)</sup>は、人びとの意味世界を探究する最も有力な方法として、量的な研究か質的な研究かを問わず広く用いられている。量的研究においては、「世論調査」や「アンケート調査」など、調査票調査（質問紙調査）という形式のインタビューとして、あらゆる分野で頻繁に用いられている。質的研究においても、参与観察と並ぶ有力な方法として活用され、人類学や社会学における民族誌的研究やライフヒストリー（ライフストーリー）研究から、精神分析や心理療法などの臨床的研究、歴史学におけるオーラル・ヒストリー研究、ビジネス分野のマーケティング・インタビューまで、様々な形式の質的インタビュー調査が展開されている<sup>(2)</sup>。

そして、こうしたインタビュー調査の方法や実際については、多くのテキストブックやハンドブック類が書かれている。特に、量的研究における調査票調査については、国内外を問わず数多くのテキストブックがある。社会調査のテキストブックと言え、通常は、この調査票調査を中心に解説がなされ、調査の企画・設計、サンプリング、実査、結果の統計的分析法まで、紙幅の多くが割かれるのが常である。他方、質的研究におけるインタビュー法についても、質的研究が盛んな欧米（特に英語圏）では、近年、質的インタビュー調査を主題的に扱った概説書、ハンドブック、リーディングスが充実してきている<sup>(3)</sup>。一方、日本では質的研究への関心の高まりに伴って、質的研究の翻訳や入門書がいろいろと刊行されるようになったとはいえ、質的研究全体の展開がまだまだ不十分であり、質的インタビューについてもそれを主題化した著作はきわめて少ないのが現状である<sup>(4)</sup>。

いずれにせよ、インタビューが、実に様々な具体的調査研究で盛んに用いられ、多くの研究成果を生み出していることは明らかである。また、その方法論に関しても、多くの文献が存在することから、インタビューが、社会調査の最も有力な方法として、確立した地位を占めていると見

なすことができるかもしれない。実際、調査票調査の場合には、企画・設計から分析・報告まで、各段階のガイドラインや技法や書式が、標準化されている度合いが強いので、「確立した方法」という印象を一層強く与える。

しかしながら、インタビューという方法について、多少とも掘り下げた考察を行おうとすると、こうした印象が表面的なものに過ぎないことがあらわになる。インタビューとは、いったいどのような営みなのか。インタビューは、どのような理論的想定に立ち、どのような論理に従って進められるべきか。インタビューによってわれわれは何を明らかにすることができ、何を明らかにできないのか。調査のよし悪しは何によって判断することができるのか。これらの問いに対して、既存の方法論書の多くは、常識的、断片的、技術的な回答以上のものを用意していない。また、回答が見いだせたとしても、そこには少なくない矛盾や対立があり、インタビュー調査者の間に共通の概念や論理が存在するとは言い難いのが現状なのである。

急いで断っておけば、すべてのインタビュー調査に共通の概念と論理が存在すべきだところで主張しようとしているわけではない。インタビューという方法は、研究目的に応じて、多様な利用が可能であり、研究を評価する規準も多様であり得る。こうした多様性自体が問題なのではない。むしろ、なぜどのようにして多様であり得るのかについての考察をないがしろにしてきたことが問題なのである。上記のような問いに対して、系統だった省察を行い、みずからが採用する立場や規準の特性を明確化すること、インタビューについての方法的自覚こそが重要である。「確立した方法」という印象の下に隠されている問題は、こうした方法的自覚の欠如なのである。

以上のような認識から本稿では、インタビュー調査の概念と論理について、近年の議論に学びながら再検討を行い、方法的自覚に貫かれたインタビュー調査のあり得べき姿や、実践上の指針を引き出していきたい。なお、インタビュー調査という場合、ここでは量的研究と質的研究を含めて考えているが、以下の検討の焦点は、質的インタビュー調査に合わせている。というのも、第1に、質的インタビュー調査（広くは質的研究）では、調査票調査のような標準化された方法が存在しない（ただし、これは質的研究の特性による不可避の事態であって、質的研究の「未熟さ」を意味するものではない）。それゆえ、上記のような問いに敏感にならざるを得ず、実際、比較的早くから、質的インタビュー研究者によって理論的方法論的省察が行われてきたからである。特に、人文社会科学における言語論的転回を踏まえた省察は質的研究において顕著であり、それらには学ぶべき点が多い。第2に、筆者はこれまで農村社会学の分野で質的インタビュー調査に従事してきたが、その方法の見直しの必要性を痛感しており、質的インタビュー調査の刷新が主要な関心事だからである<sup>5)</sup>。したがって、以下の検討は、インタビュー調査全般に当てはまるものもあるが、主要には、質的インタビュー調査を念頭に、その特性に応じたものになっている。

## 1-2 再検討の観点

### 意味世界の探究

質的インタビュー調査を再検討する上で、第1に確認すべきことは、それが意味世界探究の有効な方法であるという点である。これは従来シンボリック相互行為論が強調・重視してきた観点であるが、近年の社会調査論でも共有されるようになってきた。

例えば、盛山和夫は、相互行為論者ではないが、『社会調査入門』(盛山 2004)で、量的か質的かを問わず、社会調査とは「解釈」、すなわち「意味世界の探求」に他ならないと述べている。こうした主張は従来の社会調査論ではほとんど見かけることがなかった。盛山によれば、社会は、人びとの「意味作用」(世界や諸事物に意味を見出し、それとの関わりで自己や自己の行為を意味づけていく営み)から成り立っている。量的研究と質的研究には、用いる方法と得られるデータの特性の違いはある。しかし、いずれにせよ、経験的に観測されるデータの背後に、こうした「意味作用」を発見し理解する(=「解釈」という目的)に変わりはないという(盛山 2004: 第1章)。社会調査のこのような概念化に筆者も基本的に賛同する。その上で、本稿が追究したいのは、インタビュー、とりわけ質的インタビュー調査は、どのような「意味」に照準を定め、どのような「解釈」を志向するものなのかという点である。

### 類型化・目録化の功罪

質的研究、量的研究を含めて、インタビュー調査を包括的に論じるやり方としては、インタビューの諸技法を類型化し、目録化するというやり方が一般的である。類型化として最も代表的なのは、構造化インタビュー(structured interview)／半構造化インタビュー(semi-structured interview)／非構造化インタビュー(unstructured interview)という、インタビューのシナリオ(調査票、スケジュール、インタビューガイド)の有無、構造化の度合いによる3類型である<sup>(6)</sup>。この3類型に沿った概説は、心理学分野でとりわけ一般的で、文献も多い。そして、量的研究に適するのが構造化インタビュー、質的研究に適するのが半構造化および非構造化インタビューであるといった性格づけがなされる<sup>(7)</sup>。

このように類型化した上で、インタビュー調査で用いられてきたデータ収集および分析の様々な技法(例:半構造化インタビュー／非構造化インタビュー、個人インタビュー／グループ・インタビュー、内容分析／言説分析／ナラティブ分析／会話分析等)を、リストアップし、各技法について、それぞれの長所・短所、目的と費用に応じた利用方法などを、各論的に展開するというやり方が、インタビュー調査の概説書(例えば心理学の「調査的面接法」や「相談的面接法」の概説書)では一般的である。これは、実践的には(例えば、社会調査論の授業などにおいて)大変有用な論じ方で、筆者も一概に否定しない<sup>(8)</sup>。しかし、目録化は、往々にして、各技法間の関係を棚上げして、折衷あるいは寄せ集めの印象強く、包括的な概念や論理が見えにくいのが難

点である。質的研究を神秘化しない、誰でも使えるものにするという意味では、こうしたいわばカタログ化・マニュアル化は必要ではある。しかし、その前に、明確にしておくことがあるのではないか、つまり、インタビュー調査とは何か、その概念や論理を、近年の達成を踏まえてある程度明確に描いておくことが必要ではないか、というのが筆者の立場である。

### 質的・インタビュー・調査

こうした再概念化の作業をどう進めるか。これについて本稿では、質的インタビュー調査という言葉に含まれる3つの要素に着目して、それぞれの意味を確認し、総合するという方法を採用する。質的インタビュー調査(qualitative interview researchあるいはqualitative research interviewing)には、「質的」、「インタビュー」、「リサーチ(調査)」という3つの要素が含まれるが、本稿ではそれぞれについて、特に次のような点に注目して検討を進めたい。

まず、「質的」という形容詞について。その意味については、一般に、「数値化し難いデータを扱う」という消極的な仕方語られることが多いが、より積極的なとらえ方が必要だと思われる。すなわち、対象者(当事者)の視点、生きられた世界、世界と当事者の関係、当事者にとっての物事(自己、他者、事物、行為)の意味、これらを比較的直接的に表現するニュアンスに富んだデータ(発言、言明、語り)への着目を意味すると筆者は捉えたい。このように着目されるデータは、端的に、ことばの形式をとるデータである。したがって、その分析・解釈においては、言語・記号に関わる人文学の諸成果が積極的に活用されなければならない。シンボリック相互行為論は、こうした点を以前から強調し実践してきた。それゆえ相互行為論における「意味」へのアプローチには学ぶべきことが多いのである。(→第2節)

次に、「インタビュー」という語について。この語は社会調査論の文脈では「面接」と表現されることが多かったが、今では「インタビュー」と表されることも多くなった。本稿も後者の表記を採用するが、それは一般的な理由によるだけでなく、次のようなインタビュー概念に賛同するからである。すなわち、インタビューとはその字義通り、複数の人間のあいだでの視点・見解の交換・やり取り(inter views)であり、それを通して特定の知識を産出する過程である。そこには、相互行為と知識産出の相互依存性がある(Kvale 1996, 2007)。こうした概念化は、クヴェールに限らず、近年の質的インタビュー論に共通する観点である(例えば、Holstein & Gubrium 1995, 桜井 2002など参照)。これらを踏まえ本稿では、「アクティブな交渉過程」としてインタビューを再概念化する。(→第3節)

第3に、質的インタビューは、「リサーチ(調査)」として行われる。つまり、一定の理論と方法に基づく系統的な知識産出を目指す研究活動だという側面である。それは、「解釈提示素材」(盛山)に依拠しつつ、対象者の自己理解や一般常識を越えた「解釈」を提示する「解釈の解釈」である。「方法無き場当たり主義」でも「方法がすべての形式主義」でもなく、理論的想定、論理(調査研究の段階・手順)、諸技法の関連性、研究評価規準などを明確化することが不可欠なの

である (Kvale 1996, 2007, Kvale & Brinkmann 2008, Denzin & Lincoln 2000, 2005など参照)。「リサーチ」としてインタビューを捉えた場合、その質をいかに確保するか、一貫した論理と方法に基づく知識産出活動としてのインタビュー調査の専門性や学術性をどう確保するかが、問われるべき重要な問題なのである。(→第4節)

## 2 質的インタビューが探る「意味」

### 2-1 意味と集団生活

質的インタビューが第一に探ろうとするのは、様々な行為や経験や事物の、行為当事者にとつての「意味」である。では「意味」とは何か、なぜそれを探らなければならないのか、またどのように探るべきか。この点に関しここでは、人間行動や社会生活における「意味」の問題に理論的にも経験的にも研究努力を傾注してきたシンボリック相互行為論に主に拠りながら要点をまとめておこう<sup>9)</sup>。

人間の行動や社会生活を記述・説明する上で、「意味」への着眼は欠かすことができない。というのも、事物——物体、出来事、現象、状況、他者や自己など様々なモノやコト——に対して人間は、その直接的な刺激や圧力に応じて動くのではなく、事物がその人にとってどのような意味をもつかに基づいて行動するからである。

ある人にとっては誇りや忠誠の対象として敬礼される国旗も、別の人にとっては敵意や憎しみの対象として焼き捨てられる。ある人にとって農地が「家産」であればその土地は保持され次代に引き継がれるべきものとなるが、「資産」のひとつであると見なされれば売却可能なものとなる。あるいは、人は「望ましい」「自分らしい」と思う自己像を持ち、それに応じた振る舞いをしようとする強い志向をもつが、そうした自己も対象化され意味づけられた一種の事物であり、社会的行動における非常に重要な契機である。このように、生理的反応や反射的行動は別として、多少とも意識的な個人行動や社会的集団的な活動の記述・説明においては、様々な事物が行為当事者にとってどのような意味をもっているかの理解は欠かせないのである。

ではこうした事物の意味はどこからくるのか。「意味」は事物に本来備わっている客観的性質でも、個人の単に私的な思いや感情が付与されたものでもない。「意味」は集団生活の中で人びとが相互行為するところから生じたすぐれて社会的な産物である。事物の「意味」の源泉は、集団生活を共にする人びとが相互に事物を定義づけるような仕方でも働きかけ合うところにある (Blumer 1969=1991)。相互行為を通して発生し、集団生活の中で共有され通用する「意味」は、成員の行動や認識や経験に対する共通の解釈枠組として機能する。社会学的研究において第一に注目すべきは、そのような水準での「意味」であり、それを表すシンボルである。相互行為論が取り組んできたのは、そうしたシンボルを用いて人びとがどのような意味世界を作り上げ、どの



ような集団生活を生きているかを実地の調査研究を通して具体的に詳細に明らかにすることであった。

## 2-2 解釈と創発

「意味」をめぐる調査研究において、以上に加えて留意すべきは、集団生活の中で人びとがどのような解釈活動を行っているかである。なぜなら、直面する状況や物事に対して個人がどのような意味づけを行い、その意味に基づいて自らの行動をどのように組織しているかは、当該の社会や集団に共通なシンボルや意味を知るだけでは十全に理解し得ないからである。

共通のシンボルや意味は、当該社会の成員に対して、ある共通の語彙や論理を提供するという形で、個人の意味づけ方の一般的な枠組として働く。その枠組からまったく自由な意味づけが可能なのではない。しかし、辞書と文法によって個々の語用が決まるわけでないように、一般的な枠組が与えられたからといって、そこから直ちに事物の個人にとっての意味が一義的に定まるわけではない。「社会的な意味と個人の主観的意味の相互浸透」(宝月 1984) を視野に入れる必要があるのだ。

個人は、それぞれに固有な生活史をもち、社会生活の中で様々な状況や物事に遭遇する。それらが当の個人にとってどのような意味をもつかは、その個別具体的な状況と物事に対して当事者自身が行う解釈活動を通してはじめて明確になる。ブルーマーはこれを「自己との相互行為 (self-interaction)」と呼び、調査研究において十分な注意が払われなければならないと主張した (Blumer 1969)。

「自己との相互作用」とは、他者とのコミュニケーションを内在化した「自分自身とのコミュニケーション」である。そこでは、自分や他者を含む様々な物事や状況を自分自身に表示し、それらを定義づけ、評価し、判断するという一連の「解釈過程」が展開する。人びとは、多くの場合、程度の差はあれ、こうした自己再帰的な過程において意味解釈を行いつつ、行動し、社会生活を営んでいる。それは、既に確立した社会的意味を単に適用することではなく、個人の側での意味の修正・変更・創造を含んだ解釈活動である。

こうした個人の解釈活動がとりわけ重要な役割を果たす局面は、物事や状況についての共通の意味や定義が失効ないし不全化した「問題的状況」である。それは、例えば、災害や戦争などに直面して人びとが集合的解釈活動を展開する「危機状況」(Shibutani 1966) であり、個人がその生活史において自らの経験の意味を根本的に問い直す「エピファニー」(Denzin 1989b) である。このような局面で人びとは、様々な見解や情報や語彙・論理を動員し、新たな状況定義や行動の意味づけを集合的に(場合によっては独力で)創り出していく。こうした人びとの解釈活動を通じた意味創発もまた、相互行為論の調査研究における重要な探究テーマである。

### 2-3 メディア社会における意味

以上のような観点に加えて、近年の相互行為論では、マスメディアや文化産業による「意味」の生産や現実構成に対する批判的視点が重視されている。それは次のような現状認識に基づいて提起された視点である。すなわち、現代では、マスメディア、芸術・文化産業、諸科学、宗教、政治など、全体社会レベルの「意味製作制度／機関」によって、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、労働、家族などあらゆる社会的事柄に関する支配的でイデオロギー的な意味（＝「文化的意味」）とそれを担う「文化物」が不断に生産され、人びとの日常生活に流通・浸透している。とくに、マスメディアとポピュラー文化産業は、情報テクノロジーの進展と結び付いて、「文化的意味」と「文化物」の主たる生産者となり、「今や文化はメディアの問題であって、テレビ、ビデオ、映画、ポピュラー音楽、ポピュラー文学による文化活動が、日常生活と常識の争点を規定する権力と意味を編成している」(Denzin 1992:134)。

デンジンによれば、これがポストモダンあるいは後期資本主義と呼ばれる現代の構造変化の重大な帰結であり、したがって、人びとの意味世界を探究する調査研究において次のような点が問われなければならない。すなわち、マスメディアや文化産業によって生産される「文化的意味」が、諸個人の生活や経験の理解や解釈の当然視された枠組みとなって、日常の「現実」をいかに構成しているのか。そして、そのことが人びとの「生きられた経験」にどのような困難をもたらしているのか。さらに、その上で、そうした「文化的意味」の支配に抗するオルターナティブな意味構築の可能性が問われるべきだという (Denzin 1992など)。

従来の相互行為論では、事物の行為当事者にとっての「意味」を重視し、「意味」を生み出すと同時にその解釈に媒介される相互行為に着目し、さらに、そうした相互行為の動的な連関である共同活動を集団生活の核心だと見なすのが基本線であった。しかし、近年では上記の認識から、「意味」の問題は、行為当事者間の関係・行動・解釈のレベルでのみ把握するのではなく、相互行為に先行・超越する全体社会レベルでのコミュニケーション過程を視野に収めるべきであるとされ、カルチュラル・スタディーズなどの文化論・意味論を積極的に採り入れた新たな研究プログラムが打ち出された。また、実際そのような研究プログラムに沿った経験的研究が取り組まれるようになったのである。そこでは例えば、特定のテーマ（飲酒やアルコール依存）をめぐって映画産業が、その意味や表象をどのように生産・流通させてきたか、社会内に流通する言説システムが関連・競合しながら映画作品に持ち込まれ、どのように複合的な映画の現実を作り上げているか、そしてその映画の現実が日常生活における人びとの経験の意味づけや表象とどのように結び付いているかなどを詳細に分析する映画研究が行われている（以上について詳しくは、伊藤 2003, 2007参照）。

相互行為論の持ち味は、意味とシンボルを介した相互行為過程に密着したフィールド研究と社会分析にあるが、今日その意味やシンボルの大きな供給源・流通回路であるメディア状況への留意は不可欠となったといえよう。



#### 2-4 自然主義的探究

質的インタビュー調査を含むフィールド研究の方法上の原則として第1に挙げられるのは、「自然主義的探究 (naturalistic inquiry)」すなわち、調査研究者はなによりもまず、研究対象の人びとの生活や行動をそれが実際に生起する現場（「自然状況」）で観察すべきだという要請である。

これが要請されるのは、フィールド研究において研究者は、たいていの場合、自分が対象とする人びとやその世界に対して密接な関係や直接的知識をもたないアウトサイダーであるにもかかわらず、既成の理論や学的概念、文献知識などに多少とも習熟しているがゆえに、研究対象についてあらかじめイメージを作り上げ、それを過信しがちだからである。その過信は重大な誤りをもたらす。

人びとの行為を理解しようとするなら、研究者は人びとの対象をかれらが見るようなやり方で見なくてはならない。かれらが見るようなやり方でかれらの対象を見ないということ、つまり、人びとにとっての意味を、研究者にとっての意味で置き換えるということは、社会科学者の犯す最大の誤りである。それは架空の世界を作ってしまうことにつながるからだ。(Blumer, 1969: 51)

こうした誤りを回避するためにこそ自然主義的探究が要請される。それは、操作的定義をあえて排した柔軟な概念（「感受概念」）でもって経験的世界に臨み、その世界に精通した上で、実際に調査した事例や得られた第一次資料に即して分析概念や命題を練り上げていく帰納的な研究スタイルである。そして、フィールド研究においては、次のような注目と留意がなされる。すなわち、人びとの行動と意味とシンボルに注目して、現実の社会状況において人びとが自己や他者を含む様々な物事をどのようなシンボル（言葉、身振り、記号）を用いてどのように意味づけ、どのように行動しているのかを、現場での観察やインタビューを通して探らうとする。またその際の具体的留意点としては、①対象者の用いるシンボルとその意味を実際の相互行為と合わせて観察・記録すること（相互行為の中での意味）、②対象者の用いるシンボルと意味をその人が属する社会や集団さらに権力関係やジェンダーと関連づけて理解すること（意味の社会性・集団性）、③相互行為や共同活動の展開の中での意味の変容や創発を見ること（意味の変容と創発）、④対象の人びとがそれぞれにどのような経歴や生活経験を経てどのような自己像を抱くに至ったかを探ること（生活史と自己像）、⑤調査それ自体が調査者と対象者の相互行為であることの自覚（相互行為としての調査）などが挙げられる（Denzin 1989a）。

質的調査法は、こうした自然主義的探究の主要な方法として位置づけられる。そして、様々な質的調査法の中でも最も頻繁に用いられるのが参与観察法と質的インタビューである。参与観察法は、一定の期間、調査者が研究対象の人びとや集団の日常に何らかの形で参加し、そこでの生活・行動・会話・出来事を観察し、時に応じてインタビューを行い、第1次資料を収集・記録す

る方法だが、現場に身をおき五感を働かせてつぶさに観察・記録することがこの方法の基本である。その最大の目的は、人びとの日常的な生活や行動のあり方と様々な物事・行動・経験に対する意味づけ方——いずれも、当事者にとっては自明でも研究者にとってはそうでないことが多い——を観察を通じて理解することにある。

これに対して、質的インタビューは、様々な物事の当事者にとっての意味を、直接本人にたずねることによって探ろうとするものである。人びとの日常の行動や会話には現れにくい事柄（例えば、生活史上の深刻な経験）、したがって参与観察では把握しがたい事柄について、当事者の意味づけ方を知ろうとする場合、質的インタビューはとりわけ有効な方法となる。また、半構造化インタビューのように、明確な研究関心に基づき質問項目を統一・整序した上で、有意選択した多様な対象者に質問し自由回答形式の回答（語り）を収集する方法は、例えば、特定の問題やテーマをめぐる人びとの間に流布・通用している意味づけ方（語彙や論理）の布置状況や、それと個人的個性的な意味づけ方との区別や関連を探る上で非常に有用である。

こうした特長の違いはあるけれども、自然主義的探究の上述の趣旨からして、フィールド研究においては参与観察も質的インタビューも（さらには他の方法も）、単独で用いるよりは、併用ないし複合して用いる方が望ましい（実際にも併用・複合される場合が多い）のである。

### 3 インタビューの再概念化

#### 3-1 面接からインタビューへ

次に、「質的インタビュー調査」の第2の要素「インタビュー」について再概念化をはかろう。

インタビューは、社会調査の用語としてはこれまで「面接」と表されることが一般的だった。例えば、社会学分野の辞典やテキストブックでは「面接（法）」か「聞き取り（調査）」が一般的で、「インタビュー（法）」という見出しは見当たらない<sup>(10)</sup>。同様に、心理学、精神医学、看護学などの分野の辞書類やテキストブックでも「面接（法）」が圧倒的に多い<sup>(11)</sup>。また、社会調査関係の翻訳書においても、従来は、「面接（法）」と訳されることが一般的であったし、最近の訳でもこれが多数派である<sup>(12)</sup>。一方、日本において「インタビュー」は、「面会。会見。特に報道記者が取材のために行う面会。また、その記事」(『広辞苑』第5版)といった語義が一般的で、ジャーナリズムの用語として用いられてきた。そして、リサーチとしてのインタビューは、ジャーナリスティックな意味合いを嫌い、おそらくはその学術性・専門性を強調する意図から、「面接（法）」と表されてきたと思われる。そこには、ジャーナリズムに対するアカデミズムの側の一種の蔑視、つまり、ジャーナリストによる取材としてのインタビューは理論的方法的自覚を欠いた素朴な活動だと見なす傾向があったとも思われる。たしかに、ジャーナリストによるインタビュー論は、経験主義的で、明確な認識論や方法論を欠くものが多い。しかし、豊富な取材経験

に裏打ちされた説得力ある主張・指摘や、深い省察に基づく議論を含み、社会調査者にとって大変参考になる著作も存在するのも事実である<sup>(13)</sup>。

かくして「面接」と表されてきたわけだが、しかし「面接」という表現については、次のような問題が指摘される。

現場調査におけるインタビューを指す言葉として面接というのはかなり奇妙な用語だと言えます。たしかに辞書でも interview の訳語の一つとして「面接」があげられていますが、通常感覚から言えば、面接といえば「就職面接」や進学の際の「面接試験」くらいしか思い浮かばないのではないのでしょうか。そして、ふつうの面接では面接する側とされる側のあいだに何らかの権力差が存在します……それなのに、いざ、相手とより対等な立場で聞きとりができるという時になって、つい「面接」という言葉が口をついて出てしまったのです。(佐藤 2002: 224-225)

「面接」という表現には確かにこうした含意がある。また現実には、心理学や医学における治療的面接や相談的面接の場面では、対象者が患者やクライアント、インタビュアーは医師や心理療法士など専門家として対面し、明らかに非対称で、上下関係が生じやすい。ロジャーズが、クライアント中心のセラピーを主張したのも、支配的セラピーへの批判からだった。

そこで、調査者・対象者関係の非対称性や権力性について自覚的になった近年の社会調査論(とくに、質的調査関係の文献や翻訳)においては、「インタビュー」という表現が増えてきた。「面接」でなく「インタビュー」と表すべきと筆者も考えるし、その理由のひとつとして上記の問題点を挙げることに反対ではない。とはいえ留意しなければならないのは、「面接」を「インタビュー」と言い換えただけで、この問題が解消するわけではないということである。さらに言えば、そもそも、インタビュー調査は、「対等な」関係において行われる会話ではないということも強調すべきであろう。この点に関してクヴェールは次のように的確に指摘している。

インタビューは、一定の構造と目的をもった会話である。それは、日常会話のような自然な意見交換のレベルを超えたものであり、徹底的に検証された知識の獲得を目的にした、注意深い質問と聞き取りのアプローチである。インタビュー調査は、対等なパートナー間の会話ではない。というのも、調査者が状況を決定しコントロールするからだ。インタビューのトピックを提出するのは調査者であり、調査者はまた、質問に対する対象者の回答を批判的にかつ徹底的に追求するからだ。(Kvale 1996: 6)

リサーチとしてのインタビューでは、こうした調査者(インタビュアー)の主導性を避けることはできないし、避けるべきでもない。近年の社会調査論において、「インタビュー」という表現によって、調査者と対象者の対等な関係を含意させようとする議論は少なくないが、それが日

常生活におけるフラットな関係での会話と同様のものだと見なすのであれば問題であろう。親密で互酬的であらんとする志向（努力目標）と、インタビューという会話の構造上の非対称性を混同してはならない。

本稿で「インタビュー」と表現すべきと主張する最大の理由は、むしろ、序論でふれたようなインタビューの原義を生かした概念化に賛同するからである。すなわち、インタビューとは、字義通りに *inter views*、つまり、二人の人間が互いに関心を持つテーマについて視点・見解を交換しながら会話することを通して、特定の知識を産出する過程である (Kvale 1996: 14)。この概念化では、会話的相互行為と知識産出との相互依存性が強調されている。インタビューによって得られる情報・知識・データは、インタビュアーとインタビューイーの視点・見解のあいだで構築されるのである。ここには、知る者と知られる者との立場交換、知識の構築者と構築された知識との交替がある。クヴェールが注意を促すのは、こうしたインタビューの二重性——個人間の相互関係と、そこから生まれる視点間の知識 (*inter-view knowledge*) ——である (Kvale 1996: 15)。

### 3-2 採鉱から交渉へ

以上を踏まえた場合、リサーチとしてのインタビューは、調査者と対象者とのアクティブな相互行為＝交渉過程として、再概念化すべきことになる。すなわち、フォンタナたちによれば、

インタビューとは、データ収集のためのニュートラルな道具ではなく、[調査者と回答者という] 複数の人間間のアクティブな相互行為であり、交渉を通じて文脈依存的な結果をもたらすものである。こうした認識が質的研究者の間でいよいよ強まっている。(Fontana & Prokos, 2007: 10)

インタビューの原義に即した考察によって、近年の質的インタビュー調査論ではこうした認識が共有されるようになった。そこには、インタビューにおける対象者の発言（回答）に対する従来の想定への以下のような根本的批判がある。

従来のインタビュー調査論においても、インタビューが、調査者と対象者との対面的相互行為であり、両者の関係やインタビューの仕方が、対象者の回答に影響を及ぼすことは認識されてきた。とりわけ、質的研究を志向し、参与観察と並んで質的インタビューを活用してきたシンボリック相互行為論では早くから論じられてきた。しかしそれらは総じて、回答者に当人の経験・感情・考えをいかにしたらあるがままに語ってもらえるかという問題をめぐっての議論に終始していた。そこには、「ラポール」をうまく作り、友好的だが中立的な立場を保持して、適切な質問と記録の仕方を考案すれば、調査者およびインタビュー場面の影響を最小化することができ、あるがままで偽りのない回答が得られるはずだという想定が濃厚であった。

こうした想定では、「回答」とは、対象者に内在する（あるいは外在する）主観的（あるいは客観的）「状態」、つまり何らかの経験、感情、考え（あるいは、現実、条件、環境等）の言語

的反映だと性格づけられる。そこで、例えば英語圏のインタビュー論では、「対象者の内面をのぞき込むための窓としての回答」といった表現がなされてきた。これは認識論的には、反映論あるいは真理対応説の立場を表している。「回答」は基本的にインタビューの「文脈」から切り離し可能なものと見なされる。そして、インタビュー調査者は、そうした「回答」を通して「状態」を「掘り出す(発見する) dig out」ものと見なされる。これをクヴェールに倣って「採鉱(mining)モデル」と呼ぼう<sup>(14)</sup>。

採鉱モデルにおいては、量的研究との連続性を前提に、研究の是非(真理性・客観性)を判定する主要な規準を、収集データや分析・解釈の信頼性や(内的・外的)妥当性に求めた上で、質的研究ではいずれの規準でも量的研究と比べて信頼性や妥当性が弱いと見なされてきたのである。

### 交渉モデル

ところが、最近のインタビュー論では、こうした「回答」観がそもそも問題だとされ、相互行為論的視角のインタビューへの再帰的な適用が主張される。シンボリック相互行為論に即して言えば次のような議論となる。すなわち、かつてブルマーは、シンボリック相互行為論の基本前提として、①人間は様々な事物に対して、それらが自分にとって持つ意味に基づいて働きかける、②事物の意味は社会的相互行為の過程から生じる、③意味は解釈過程の中で扱われ修正されるという3点を挙げた(Blumer, 1969: 2)。これら(とりわけ②)に照らせば、インタビューにおける「回答」は、調査者と回答者の相互行為を通して創発する構築物であり、その相互行為過程から独立したものとして取り扱うことはできないのではないか、という議論である。

先述のフォンタナらの主張はこうした議論の延長線上に提起されたものである。これを、「交渉(negotiation)モデル」と呼ぼう<sup>(15)</sup>。このモデルでは、インタビューで得られた「回答」の取り扱いにおいて、それがどのような調査者・対象者関係の中で、どのようなやりとりを通して、どのように語られたものかという「インタビューの hows」が重要になる。従来のインタビュー調査では、「回答」の内容そのものに関心と分析が集中し hows はほとんど省みられることがなかった。しかし今や「回答」は、調査者と回答者の相互行為(一種の「協働」)を通して紡ぎ出される「語り」(ナラティブ)であり、常に、関係依存的・文脈依存的・創発的なものとして捉えられねばならない(Holstein & Gubrium 1995)。その上で、「語り」の意味内容に立ち戻り、分析と解釈に向かうべきだという研究方針が提起されているのである。

デーヴィスによれば、インタビューは、①テキスト(生み出された言説)、②相互行為(調査者と回答者による言説の産出過程)、③コンテクスト(テキストと相互行為の双方に影響を及ぼす社会的条件)という3つの水準から捉えられる(Davies, 1999: 99)。これに従えば、交渉・相互行為としてのインタビューという視点は、従来の研究では見落とされがちだった②の産出過程への着目を促したと言える。そして、交渉モデルにおいては、従来の研究評価規準は適用不能と見なされ、それに代わる代替的規準が提案されることになるのである。



## インタビューの文脈

「回答」が文脈依存的なものだとすれば、その分析・解釈を「文脈」に即して行わなければならない。ではいったいどのような「文脈」をわれわれは考慮すべきであろうか。

第1に考慮されるべきは、「回答」が位置する直接のコンテクスト、すなわちインタビュー場面であろう。この場面について、調査者と対象者が対面し相互行為・コミュニケーションを展開する過程を含む、やり取りの詳しい記録（トランスクリプト）を、「経験的資料」(データ)として開示し、それに即して、対象者の「回答」を分析・解釈するのである。なお、当然ながら、この記録をどこまで詳しくするかは研究目的によって異なる。意識分析のように回答の what に焦点を合わせる場合と、会話分析のように回答の how に焦点を合わせる場合とでは、トランスクリプトの詳しさと表記法は異なってくる。いずれにせよ、こうしたやり取りを回答の文脈として押さえながら、分析・解釈を行うことが、解釈妥当性の基礎となる。

第2に、回答の分析・解釈において考慮されるべき間接的文脈としては、インタビューという相互行為と生み出されたテキストの双方を社会的に条件付けているもの（コンテクストのコンテクスト）を挙げることができよう。例えば、調査者側と回答者側双方がインタビュー場面に持ち込む「言語的資源」(それぞれが属する解釈共同体で流通する語彙、論理、知識)、社会生活条件と個人誌（生活史）、そこから生じた関心、信条などであり、これらに関する情報・知識に照らして、回答を分析・解釈するのである。筆者が行ってきた農民インタビュー調査の場合で言えば、「農業観」や「土地意識」に関わる発言を分析・解釈する際に、その発言の背後にあって実際に自己言及されることも多い本人の営農体験や他業種への就業体験、村の仲間との議論、テレビ・新聞などメディア情報、さらに、より客観的な生活条件（経営内容、家族構成など）に照らして、発言の意味を読み解くという作業である。

### 3-3 特有な会話としてのインタビュー

リサーチとしてのインタビューは、特有な会話である。人と会って話をし情報や意見を交換するという意味では、日常会話やその他社会生活上のさまざまな会話と共通するが、研究活動の一環として行われる特有な側面をもっている。

第1に、リサーチとしてのインタビューは、会話の形式・内容・目的に関する反省（方法論的自覚）が要求されるのに対して、日常会話では一般に希薄である。つまり、日常会話と対比すると、リサーチとしてのインタビューは、質問形式についての方法的自覚や、インタビュアーとインタビュー対象者の相互行為のダイナミクスについての注目や、話されたことを批判的に捉える点などに特徴がある。

第2に、先述のように、リサーチとしてのインタビューには、通常、権力上の非対称性がある。多少とも自発的でナイーブな対象者に対して、専門家が質問を行う側に立っているのである。日常会話や哲学的対話のような互恵的なやりとりとは対照的に、ここには、専門家が対象者に対し



て一方的に質問を行うという傾向が強い。調査者が状況を決定し会話をコントロールし、インタビューのトピックを提出し、対象者の回答を批判的に吟味する（質的インタビュー調査ではとくにその場で随時吟味・追及を行う）。したがって、対等で互恵的な「対話」にはなり難い。このことは、参加型のアクション・リサーチの場合でも基本的に当てはまることだ。だからこそ、調査倫理が重要になるのである。

第3に、リサーチとしてのインタビューでは、基本的に、調査者が問いを発し対象者が答えるという、Q & Aの連鎖が会話の特徴である。この会話においては、調査者の質問の内容・形式・言葉遣い、そして態度や表情などが対象者の回答を方向付ける。

### 誘導の意味

上記第3点に関連して誤解を恐れずに言えば、インタビューとりわけ質的インタビュー調査においては、「誘導」は不可避である。あるいはむしろ、積極的な意味をもち、活用すべきであるとさえ言える。

急いで断っておけば、ここで「誘導」とは、調査票調査におけるいわゆるワーディングの問題として指摘されるような、不用意な言葉遣いや質問の順序による意図のないし非意図的な効果として、回答を方向付けてしまうことを意味しているのではない。むしろ、調査の目的や仮説、その背後にある理論的視角に見合う形で問いを発するということ（＝パースペクティヴな偏り）を意味している。この意味では、いかなるインタビューも「誘導」を避けることはできないし、避けるべきでもないのである。「問いが答えを用意する」という不可避の事態を自覚し、いかに適切に「誘導」するかこそが重要なのである。この「誘導」の問題についてクヴェールは次のような興味深い指摘をしている。

質的インタビュー調査は、回答の信頼性を繰り返しチェックするために、また、インタビュアーの解釈を検証するために、誘導質問を用いるに適している。一般的見解とは反対に、誘導質問は常にインタビューの信頼性を減じるわけではなく、信頼性を高める場合もあるのだ。今日の質的インタビュー調査において誘導質問は、多用されているというよりは、意図的に（熟慮の上で）用いられることが余りに少ないとさえ言える。注記すべきことは、回答に先立つ質問が誘導になるというだけでなく、回答に対するインタビュアーの言葉や身体上の反応が、その回答に対する肯定的ないし否定的な補強要因として作用することも、更なる質問に対する回答者の回答に影響を及ぼすこともあるということである。誘導質問の技術的問題が過度に強調されるのに対して、プロジェクトに基づくリサーチ・クエスチョンのもつ誘導的な効果については注意があまり払われていない。あるプロジェクトに導かれたリサーチ・クエスチョンは、どのような回答が得られるかを決定するのだ。課題とすべきは、誘導的なりサーチ・クエスチョンを避けることではなく、質問の優位性というものもしっかり認識して、方向づけの質問を明示し、読者に対して、研究結果への質問の影響を評価

できるように、また知見の妥当性を評価できるように、情報提供することである。……誘導質問が問題だと強調されがちだという事実は、素朴な経験主義による。調査者と独立に、客観的な社会的現実に対して、中立的な観察によって接近できるという信仰であるが、これはポストモダニズムのパーспекティブによって打ち破られた。決定的な問題は、誘導するかしないかではなくて、どこで（どの点で）インタビュー質問が誘導すべきか、そして、質問が有意義な方向付けをなし得るかどうか、新しく信用性のある興味深い知識を生み出せるかどうかなのである。(Kvale 1996: 158-159)

「誘導」を避けるべきだとする主張の背後には、調査（者）と独立に対象（者）の側に答えられるべき回答があらかじめ存在しているはずだという想定がある。近年の質的インタビュー調査論は、この想定を放棄から出発する。そして、いかに適切に「誘導」するかという観点から、インタビューの技術論が考案されるのである。

### インタビューの会話術

ここに調査として特有な会話術の必要性が位置づけられる。それは、細心な質問と傾聴を基本とする技術であって、経験を積むことではじめて体得される職人芸 (craftsmanship) の側面をもつ。しかし、欧米の質的インタビュー調査のテキストブックではこれまでの蓄積を踏まえて種々解説がなされているように、この技芸は言語化不能な「秘術」ではない。

例えば、半構造化インタビューにおける質問の仕方について、以下のような質問の分類や質問の要領が共有知識として多くの概説書で解説されている。

- ①導入の質問：「～について話してくれますか」「～の時の場面を覚えていますか」「～のエピソードで何が起こったのですか」「～の場面をできるだけ詳しく描いてくれますか」など、オープニングで、相手の自発的な豊かな発言を引き出すための質問。
- ②フォローアップ（追跡）質問：相手の回答を注意深く聞き、その上で、その回答に対して質問をしたり、うなづいたり、間をとったりして、さらなる回答を促す。
- ③探りを入れる（確認の）質問：「それについてもっと話してくれますか」「もっと別の例をあげてくれますか」など、回答の内容をより追跡する質問。
- ④特定化（具体化）の質問：フォローアップの一種だが、より操作的戦略的な質問。「その時あなたは どう思ったのですか」「不安を感じた時何をしたのですか」「その時身体はどう反応しましたか」など。
- ⑤直接的質問：単刀直入に特定のトピックや次元を導入しそれに関して発する質問。ただし、これはインタビューの後の方で行うべき質問、相手から自発的にテーマや現象に関して対象者自身の記述を聞きだし、相手にとって何が重要なことが分かった後で行うべき質問である。
- ⑥間接的質問：「他の人は～をどう見ていると思いますか」など、直接には他の人の事を聞きなが

ら、間接的に、当人の意見や態度を探るもの。

⑦枠付け（組織化）質問：テーマに関して聞くべきことは聴いたと判断した時、質問を切り上げて、相手の長い回答を中断させ、次のテーマに移る。インタビューの道程をコントロールする質問、「別の話題に移りたいのですが、いいですか」など。

⑧沈黙：質問の集中砲火を浴びせるのではなく、沈黙し、間をおいて、対象者が連想や反省を働かせる余裕を与えること。

⑨解釈の質問：相手の回答を繰り返したり、「～という意味ですね」「～と理解してよろしいですか」など、回答の意味を確認する質問。

（以上、Kvale 1996, 2007, Kvale & Brinkmann 2008などによる。）

このような共有財産化された技術を本で学びつつ、実地で習熟することは重要である。ただし、クヴェールたちも強調しているように、インタビューにおいてこうした技術に習熟することよりも一層重要なことは、偏見なく、熱心に、積極的に、相手の話に耳を傾けるという「傾聴」の修練である<sup>(16)</sup>。

## 4 リサーチとしての質的インタビュー

### 4-1 質的インタビュー調査の質

以上のようにインタビューを再概念化した上で、実際に質的インタビュー調査を行う場合、重要になってくるのは、インタビューの「リサーチ」としての質をどう確保するか、一貫した論理と方法に基づくエンピリカル（経験的／実証的）な知識産出としてしてのインタビュー調査の専門性や学術性をどう確保するかという問題である。最後にこの点について、クヴェールたちの議論を紹介・論評する形で考えていこう。

インタビュー調査の成否の鍵を握るのは、実施されたインタビューの質である。それが研究目的に応じた豊かな情報・知識をもたらしているとき、その精確な記録は分析・解釈の確固たる基礎となる。では、より具体的に、どのようなインタビューが質が高いと言えるのか。これについてクヴェールたちは次のような規準を挙げる。

- ①対象者から自発的で豊かで具体的に有意義な回答を得ているかどうか。
- ②質問が簡潔でそれに対して十分長い回答を得ているかどうか。
- ③インタビュアーが、回答の関連する諸側面の意味を追跡し明確化しているかどうか。
- ④インタビューの意味の大部分がインタビューそれ自体の中で解釈されているかどうか。
- ⑤インタビューの最中に、対象者の回答についてのインタビュアーの解釈を検証しているかどうか。

⑥インタビューが自己コミュニケーション的であるかどうか、つまり余計な記述や説明をそれほど必要としないようなストーリーをインタビューそれ自体が内蔵しているかどうか。(Kvale 1996: 145)

こうした規準を満たすようなインタビューが実現するためには、一方でインタビューの目的を理解し調査に協力する姿勢を示してくれる対象者の存在が不可欠である。と同時に、他方、そうした対象者に対して、適切な質問を行い、回答を適切に理解・解釈し、インタビューを適切に進行させるインタビュアーの力量が求められる。再びクヴェールたちによれば、優れたインタビュアーに求められるのは次のような能力である。

- ①知識：インタビューのテーマについて広範な知識をもっていること。
- ②枠付け：インタビューの目的を話し、手順を方向付け、適切に結果をまとめ、終える能力。
- ③明確さ：明快で分かりやすく簡潔な質問をする能力。あえてストレスを与えるインタビューの場合は、例外的に曖昧で複雑な質問をする能力。
- ④温和さ：相手が話しやすくなるような態度、落ち着き、傾聴姿勢、受容性。
- ⑤感受性：発言の内容および形態（雰囲気）を的確に捉え、ニュアンスに富んだ記述解釈を引き出す力。
- ⑥開放性：発言の新しい展開に開かれた態度。
- ⑦舵取り：知るべきことにインタビュー対象者の回答を焦点付け、場合により、発言に介入し、逸脱から引き戻す力。
- ⑧批判性：発言をすべて額面どおりに受け取らず、発言の信頼性や妥当性を検証する質問を発する能力。発言の論理的一貫性、発言の証拠をチェックする能力。
- ⑨記憶力（想起力）：前の発言を想起させ、後の発言と関連付け、エラボレートする力。
- ⑩解釈力：発言の意味を明確にし展開する能力、発言についてのこちらの解釈を確認する能力。

(Kvale 1996: 147-150. Kvale 2007, Kvale & Brinkmann 2008も参照)

優れたインタビュアーは、インタビューのテーマに習熟しているとともに、人間的相互行為にも習熟しているのが理想である。こうした能力を向上させるには、インタビュー方法論の文献を読んだり、熟達した研究者に教えを受けたりすることも必要・重要であるが、それ以上に、自分自身でインタビューの経験を積むことが最も重要であることは言うまでもない。その修練のためには、パイロット・インタビューを行い、みずからいろいろな役割を演じてみるといった方法も有効であろう。

#### 4-2 質的インタビュー調査の7段階

質的インタビュー調査においては、研究の目的や研究対象の特質に応じて様々な方法が用いられる。構造化した個人インタビューが有用なこともあれば、半構造化したグループ・インタビューが適切なこともある。分析・解釈においても、グラウンデッド・セオリーに基づくコード化が有用なこともあれば、KJ法が有用な場合もある。ときには幾つかの方法・技法を併用することが適切な場合もある。したがって、質的インタビュー調査と一口に言っても、その進行は個々の調査ごとに個性的な展開を示すものであろう。しかしながら、質的インタビュー調査をリサーチとして進めていく上で、その進行過程に共通して踏まえるべき段階ないし局面というものを想定することはできよう。

一般に、社会調査において、問題関心→調査の企画とデザイン（設計）→実地調査（データ収集）→データの整理と分析→報告書の作成と公表、といった一連の段階が想定されているが、質的インタビュー調査についても、これと類似の段階ないし局面を想定することができる。例えば、クヴェールたちは、以下に見るように、①主題設定→②調査デザイン→③実査→④文字起こし→⑤分析→⑥検証→⑦報告、という7段階を想定している（Kvale 1996, 2007, Kvale & Brinkmann 2008）。

ただし、こうした段階論は、インタビュー調査が時間的にこの順に従って進行する直線的過程だということを意味するわけでは決してない。質的インタビュー調査に限らず、実際の調査では、実査の中で当初の主題やリサーチ・クエスチョンの見直しが迫られるといった事態がしばしば起こるし、実査後の過程も、分析→検証→報告という順にならない場合も多々あるからである<sup>(17)</sup>。

したがって、これらの段階は、実際の時系列的な順序というよりは、調査過程において論理的に識別できる局面ないし位相と理解すべきであろう。その上で、これらを識別し、調査の進行において常に念頭に置くことは、非常に意義深いといえる。つまり、質的研究についてはしばしば、量的研究と対比して、その流動的開放的性格が強調されるが、そのことはややもすると、質的研究が本性上、明確な方針や方法意識を欠いた場当たりの活動（「無方法の方法」）にならざるを得ないものだという印象を与える。しかし、質的研究といえども、固定的定型的なものではないにしても、どんな研究においても踏むべき段階（ないし局面）が存在すると考えなければならないだろう。そして、これらの段階を踏むことによってわれわれは初めてリサーチとしての質を確保できるのである。そのことの確認は、質的研究が、熱い思いを抱いてフィールドに乗り出しながら、しばしば、暗礁に乗り上げたり、方向を見失ってしまうといった事態を回避するために、大きな手助けになるだろう。このような了解の上で、クヴェールたちが指摘する各段階の特徴や留意点を見よう。

##### ①主題設定

インタビューに先立って、研究の目的と調査すべき主題（テーマ）を明確にする段階、つまり、

何のために (why), 何を調べるか (what) を明確にする段階である。これらが明確にされてはじめて、調査においてどのような方法を用いるか (how) という問題が立てられる。この段階で重要なのは、調査テーマの研究上の意義や社会的意義を考え、先行研究を評価し、自分が依拠する立場・視角・理論を明示し、そこから調査研究上の的を絞った問い (リサーチ・クエスチョン) を導き出すといった一連の作業である。ここでは、既存の調査技法についての習熟も必要となる。また、場合によっては、本調査に先立って、予備調査を行うことも必要となる。(Kvale 1996 : 81-97)

## ②調査のデザイン

リサーチ・クエスチョンを実際に追求できるような形で調査をデザイン (設計) する段階である。時間、資源、用いる技法、対象者などを考慮し、質問事項・シナリオ・インタビューガイドを作成する。この段階では、調査に関わる倫理的問題の考察も必要となる。調査デザインは、後続の各段階を十分見通して、特に最終的な報告の姿を念頭に置きながら、時間をかけて行われるべきである。(Kvale 1996 : 98-108)

以上の2つの段階 (局面) が、質的インタビュー調査の成否にとって決定的に重要であることは疑いない。というのも、調査が暗礁に乗り上げる最大の原因は、研究主題の設定と調査デザインに十分な時間と努力が注がれず、その結果、調査目的やリサーチ・クエスチョン、そしてインタビューガイドが明確化されないことにあるからである。

## ③インタビューの実査

インタビューガイドに基づいて実際にインタビューを行う段階である。実査において調査者は、対人関係のダイナミクスに配慮しながら、インタビュー状況を適切にコントロールし、傾聴と細心で多角的な質問を心がける必要がある。対象者の発言に対しては、共感をもって理解するとともに、調査目的や理論視角に基づく批判的見地を維持する必要がある。インタビューを通して、上述したようなニュアンスに富んだ語りを得ることに努めるとともに、非言語的情報の記録・記憶にも留意すべきである。また、できる限りインタビュー現場において、対象者の発言の意味を確認し、解釈することにも努めなければならない。調査者は、インタビュー終了時には、既にある程度、発言に関する意味解釈を得ていることが望ましい。(Kvale 1996 : 124-143)

## ④文字起こし

分析に供すべき精確で詳細なインタビュー記録を文字に起こす段階である。インタビューが録音・録画できた場合はいわゆる「テープ起こし」の作業になるが、録音・録画が不可能または望ましくない場合には、インタビュー中のメモや記憶からの記録作成という作業になる。クヴェー



ルの議論は前者の場合を想定したものだが、その趣旨は後者の場合にも基本的に当てはまるだろう。

文字起こしは、単純な事務的仕事ではなく、それ自体が解釈の過程であるという点を強調すべきである。従来の方法論書においては、インタビュー場面の相互行為性について多く論じられているのに比して、口頭会話を文字テキストに変換することへの注意は少なかった。つまり、インタビュー調査における言語の性格が軽視されていたのである。しかし、クヴェールによれば、文字化するということは、固有のルールをもった口頭言語から、別のルールをもった文字言語への変換であり、その意味を理解するには言語学の知見が必要となる。記録は、脱文脈化された会話であり、ひとつの抽象である。それは、地形地図が実際の風景の抽象であるのと同様である。(Kvale 1996: 160-165)

どのような記録(トランスクリプト)を作成するかは、調査目的に応じる。唯一の正しい記録というもの存在しない。建設的な問いは、自分の調査目的にとってはどんなトランスクリプトが有用かである。音声だけより、視覚情報も盛り込まれた方が情報としては豊富になる(ただし、分析は一層やっかいになる)。しかし、だからといって、インタビュー場面の客観的表象の問題が解決されるわけではない。(Kvale 1996: 166)

通常の調査論では、インタビュアーの質問の信頼性は盛んに論じられるが、テープ起こしする人の信頼性はあまり論じられない。実際にテープ起こしを複数の人でやってみれば分かることだが、トランスクリプトが完全に一致することは有り得ない。曖昧な聞き取れない言葉、笑いや叫びなどの音声ジェスチャーの表現や解釈など、微妙な差異は必ず生じる。しかし、クヴェールによると、差異は考えられるほど大きくないことも事実で、複数の人間による対話と相互批判によって、かなりの程度の間主観的信頼性を確保することはできるという。また、どのように文字起こしするかについて標準的なルールや形式はないが、ただひとつ編集上のガイドラインが有り得るとすれば、それは、対象者がどのような形式で表現してほしいと望んでいたかを考慮することだという。(Kvale 1996: 170)

文字起こしの段階で重要なことは、トランスクリプトというテキストとの対話である。調査者は、テキストの意味をめぐって「著者」と想像上の対話を行うべきである。「著者」とは、インタビュアー(調査者)とインタビューイー(対象者)であり、その相互行為の産物がテキストである。相互行為の結果を、その産出過程を忘却して、あたかも所与のものとする傾向に注意すべきである。(Kvale 1996: 160-173)

### ⑤分析

質的インタビュー調査の目的は、対象者の生きられた意味世界において調査テーマがどのようなものであるかを記述し、分析・解釈することにある。実査から文字起こし、そして、分析から執筆に至る調査過程は、この記述から分析・解釈への連続した過程である。通常、分析や解釈は、

データ・資料の収集と整理の後に位置づけられるが、実際には実査の段階から始まっているというべきである。すなわち、インタビュー場面において調査者は、対象者の発言について、その意味を解釈しながら聞き、記録している。インタビュー場面で発言の意味を確認することも解釈の一部である。文字化の過程においても、解釈は行われている。そして、これらのいわば予備的な解釈を通して調査者は、ある程度の見通しを得た上で、本格的な分析・解釈の段階を迎えるのである (Kvale 1996: 187-190)。なお、こうしたクヴェールたちの議論に付言して、インタビューにおける対象者の発言自体が対象者による自己の経験世界についてのひとつの解釈であり、したがって、調査者による解釈は、「解釈の解釈」という性格をもつこと、また、調査者との相互行為を通して、対象者が自己の経験や行動について新たな発見 (意味づけ) を行うこともしばしば生じるという2点を指摘しておきたい。

インタビュー記録という質的データを分析するには、質的データ分析の種々の手法を適用することができる。クヴェールたちは、欧米において流布・適用されているインタビュー分析の手法を、「意味縮約 (meaning condensation)」、「意味カテゴリー化」、「ナラティブによる意味構造化」、「意味解釈」、「アドホック・メソッド」の5つに整理している<sup>(18)</sup>。

#### ⑥ 検証 (verifying)

これまでの調査の各段階における作業 (問題・テーマ設定、リサーチ・クエスチョンの設定、インタビューガイド、インフォームド・コンセント、記録、分析・解釈など) が適切・妥当であったかどうかについて、自他 (調査者自身、対象者、研究仲間、学会など) による確認・チェックを行う段階を意味する。時系列的には、6番目に位置するというよりは、①から⑤の段階ごとに行われると理解すべきであろう。

この段階 (局面) は、通常の調査論ではあまり強調されないが、クヴェールは、「妥当性の社会的構築」という見地から重視している。この見地は、従来の実証主義的な妥当性概念に対して、言語を媒介にした知識や現実の社会的構築性を指摘するポストモダニズムの立場からの批判を踏まえて提起された代替概念である。クヴェールによれば、言明と客観的世界との一致・対応 (真理の対応説) を前提にした従来 の妥当性概念は、言語論的転回を経た現在、維持困難となった。真理対応説が放棄されるとすれば、知識の妥当性の問題は、客観的現実との対応による検証 (テスト) の問題ではなく、反証可能性 (falsifiability) あるいは弁護可能性 (defensibility)、競合し合う反証可能な解釈間の選択の問題へと移行する。つまり、妥当性は、妥当でないことの源泉をめぐる徹底した検討 (反証) を通して確かめられるというのである。可能な反証が自他によって試みられ、それを経ても生き残った言明・主張は、相対的な妥当性を持つと見なされる。この反証に関わってくるのは、大別して、対象者 (とその人が属する解釈共同体)、研究者 (とその人が属する解釈共同体)、そして、報告公表以後は読者 (とその人が属する解釈共同体)、という3つのレベルの他者 (とそれぞれの属する解釈共同体) であるという。(Kvale 1996: 229-252)

これらの他者（とそれぞれの属する解釈共同体）との対話を通じた合意的妥当性（「コミュニケーション的妥当性」）と合わせて、クヴェールは、代替的な妥当性概念のもうひとつの側面として、「プラグマティックな妥当性」、すなわち、調査研究を通して得られた知見と社会的実践との連関性を挙げる。というのも、合意的妥当性だけでは、調査知見をめぐって解釈学的循環や脱構築が無限に続き、結果として、知識の実践的効果や権力性が看過される恐れがあるからである。リンカンとグーバ（Lincoln & Guba 1985）は、早くから、こうした合意的妥当性の限界を指摘し、それを超えるため、調査知見が、研究参加（協力）者の理解のレベルを高め、行動の能力を高め、自分の生活のコントロールを増進し、エンパワーメントに資するかどうか、という実践的規準を提起してきた。これに賛同してクヴェールは、どのような質的インタビュー調査も、その知見をもたらす社会的効果を考慮すべきであるとする。その上で、より積極的な調査形式としては、調査者と調査参加（協力）者との協働によるアクション・リサーチがひとつのあり得べき姿であろうと結論している。客観性や価値中立性を標榜する従来の調査観を否定し、同時に、極端な相対主義としてのポストモダニズムをも批判する立場から、こうした実践志向が導き出されている。

なお、こうしたコミュニケーションや行動実践の観点から妥当性を理解するといっても、それは、正確な観察や厳密な論理的議論の重要性に取って代わるものではないということは注記しておくべきだろう。クヴェールたちの主張の眼目は、従来の実証主義において知識の持っているコンベンショナルな側面と実践的な側面がともに不当に軽視されてきたことを指摘して、調査研究における真理の性質についてより広い概念を求めているのであって、学術性・専門性に関わる従来の了解事項を全否定するものではないからである。

### ⑦報告

上述のように、妥当性にコミュニケーションを含むとすれば、報告をどう書くかは重要な問題になる。報告は、研究者の観点を解釈という形で付け加えただけの、対象者の見解の単なる再提示ではない。それ自体がひとつの社会的構築であり、文体の選択や文学装置によって、対象者の生きられた世界について特定の見解を提示することである。社会調査における会話やレトリックへの注目は、「表象の危機」とともに、調査知見の表象／表現（representation）の問題を主題化した<sup>(19)</sup>。

クヴェールによれば、従来の調査報告は、質的研究における過度な経験主義の影響によって、長々と続く引用、発言の断片化、陳腐な類型化など、「退屈な」記述に満ちている。そして、従来の報告では、報告に至った方法が、ブラックボックス化していることが多い。対象者の記述は分厚くても、調査状況、調査過程の記述は欠落していることが多いのである。その理由のひとつには、質的調査は明確な形式的手続きがなく、創意工夫、即興も多いことが挙げられる。また、そのような調査者自身の活動を記述するという慣習がないことも挙げられる。さらに言えば、官僚主義的な形式手続きと科学を等価視する実証主義の、方法へのいわば偶像崇拜が、質的研究者

の間に自分たちの方法への不安、劣等感を呼び起こし、それを他者に悟られないために、自らの方法について沈黙するという、防衛反応を引き起こしているとも言える。(Kvale 1996:255-256)

しかし、「表象の危機」を経た今、質的研究におけるエスノグラフィックな著述は、研究対象の人のびとやその社会的世界に関する客観的で価値中立的な叙述ではあり得ず、理論、価値、イデオロギー等の負荷を負った言語による積極的な現実構成だと捉えられる。それゆえ、何のために、誰のために、誰に向かって書くのかということを実感しつつ、これに見合った形で「いかに良く書くか」という問題は、単なる表現技法の問題ではなく、質的研究の成否に関わる中心的な問題になった。そして、今や、質的研究報告に求められるのは、精査に耐えられるような厳密性と、読者に訴えかける審美性や訴求性とを兼ね備えた表現である<sup>(20)</sup>。

報告書は、一般的に、序論（主題設定）→方法（設計、記録、分析、検証）→結論（知見提示、議論と考察）という構成をとる。こうした構成を踏襲しながら、執筆において留意すべき点としてクヴェールたちは、結果の信用性を読者が評価できるように、方法的手続きについて十分な情報開示を行うことを挙げている。そこでは例えば、調査デザインについて、対象者はどのような理由からどのように選ばれたのかを明示し、研究結果を一般化ないし他に転用する可能性を読者が判断できるようにすること、インタビュー場面について、場面の雰囲気、時間、ラポール、質問内容、ガイドラインなどを明らかにすること、インタビュー記録について、誰がどのように文字起こししたか、検証について、インタビューや文字起こしや分析の信頼性をどのようにチェックしたか、偏った選択的解釈を相殺するためにどのようなコントロールを行ったか、知見の妥当性をどのように論証したかを明らかにすること等が重要だという（Kvale 1996:264）。この他にクヴェールたちは、インタビューの引用の仕方についても具体的な提言を行っている<sup>(21)</sup>。

## 評価と注記

クヴェールたちの議論の眼目は、インタビューの実査および分析の諸技法の習熟に努める一方で、以上のような各段階の特徴や留意点を自覚しながら調査・分析・執筆を進めることによって始めて、質的インタビュー調査の「リサーチ」としての質が確保されるということであろう。これには筆者も大いに賛同したい。しかしその上で、幾つか注記すべきこともある。

第1は、質的インタビュー調査がどのような段階や手続きを踏んで進められるべきかについて、すべての点で質的研究者の間に明確な一致ないし標準が存在するわけではないという点である。したがって、クヴェール自身も認めることだが、かれらの段階論を標準として特権化することはできない。あり得る様々な議論のひとつという相対的な受け止めが必要であろう。デンマークの教育心理学者として研究に従事してきたクヴェールのキャリアや経験に基づきつつ、欧米の研究者・読者に向けて提起されているという文脈からも相対化すべき面があろう。

とはいえ、第2に、クヴェールの調査段階論の基本線となっていると思われる以下の諸点は、現代の質的研究者の間で大方の賛同を得ることができるだろう。すなわち、一貫した手続きに従

うこと、調査過程(目的、諸前提、データの生成と解釈など)を開示すること、調査(者)と対象(者)との再帰的關係を踏まえること、研究評価の代替規準を考案すること、対象者、研究者、読者との相互關係と対話を通じて間主観的な妥当性を構築すること、研究結果に対する責任倫理の自覚などである。これらは、現代の質的研究の多様な立場やアプローチを横断して合意可能な了解の一部であると思われる。

第3に、長年の調査経験を踏まえつつ、理論上、方法上、実践上の諸問題を総ざらいした上で、あるべき質的インタビュー調査の姿を示そうとするところから、クヴェールたちの議論には一種の理想論ともいえる面がある。つまり、各段階について挙げられる留意・遵守事項は数も多く、その要求水準も高いものが少なくない。例えば、解釈の妥当性を確保するためにかれらが設定する「検証」段階では、相当に実行の難しい手続きや作業が要求されていると思われる。その上に日本の調査環境なども考慮に入れると、これらの要求をすべて満たすような調査は実際にどれほど可能なのかという疑問を禁じ得ない。われわれとしては、質的インタビュー調査の諸問題についてのかれらの包括的かつ徹底的な検討を参照しつつ、初学者でも、また日本の調査環境でも実行可能なガイドラインやチェックリストなどを案出し、試行実践していくことがかれらの議論を生かす建設的なやり方ではないかと思うのである。

## 5 小括

近年の議論や達成を参照しながら質的インタビュー調査の再概念化をはかってきた。以上をふり返りつつ、今後の課題を確認して終わりとしよう。

まず、質的インタビュー調査の第1の要素「質的」については、「行為当事者にとっての意味を自然主義的に探る」という形で捉えた。これは筆者の理解するシンボリック相互行為論の見地に引き寄せて(この潮流の具体的な調査研究の成果にも照らして)、意味内容の明確化をはかったものである。この概念では狭すぎるという反論も予想される。たしかに、「質的研究」という言葉は、民族誌や事例研究法から会話分析や言説分析まで新旧のあらゆる種類・立場の研究を含むきわめて包括的な名称として用いられることも多い。しかし、大方の了解として「人間行為の意味の理解」が質的研究の目的と見なされること(Schwandt 2007:248参照)、その上で意味の当事者性を重視しそれに応じた探究方針をもつ(さらに、近年では意味のメディア媒介性も強調する)相互行為論の特長を生かした概念化をはかったことは、一般的用法から見れば限定的ではあっても狭きに過ぎることはなく、むしろ質的インタビューの焦点と方針を明確化した利点の方が大きいと考える。

第2の要素「インタビュー」については、まず面接からインタビューへと表記を変えるべきと主張したが、それは、「探鉱モデル」から「交渉モデル」へという、インタビューをどのような



営みと捉えるかをめぐって生じた根本的な視座転換を積極的に評価するからである。「交渉モデル」に立った場合、インタビューにおける回答や発言は、関係依存的で文脈依存的で創発的なものであるという基本的了解のもとに、分析・解釈に供されるべきものとなる。したがって、分析・解釈においては、インタビューという相互行為状況の考慮、さらに、その相互行為と発言を社会的に条件づける文脈の考慮が必要になってくるのである。また、本稿では取り上げなかったが、インタビューの相互行為性の認識は、調査者と調査対象者との関係のあり方(倫理的問題も含む)の見直しを導くことにもなる<sup>(22)</sup>。とはいえ、本論で述べた通り、インタビューにおける調査者(質問者)のある種の主導性は事の本性上不可欠であって、その基盤として会話術などインタビューの技量形成や傾聴の修練が重要であることに変わりはない。

第3の要素「リサーチ」については、一貫した論理と方法に基づく研究活動として質的インタビューが備えるべき専門性や学術性をどう確保するかという問題として捉え、それに関し包括的な検討と提案を行っているクヴェールたちの仕事を紹介・論評した。かれらの仕事は、幾つか相対化すべき点はあるものの、最前述べたように、現代の研究水準において質的インタビューが「リサーチ」として満たすべき条件の輪郭をよく明らかにしている。それは、われわれの調査実践においても大いに参照・尊重されるべき有用性と説得性を有している。なお、本稿ではクヴェールのいう「検証」段階の問題としてわずかに触れるにとどまった点であるが、研究の評価規準をいかに再確立するかという問題は、「リサーチ」としての質を確保する上で理論的にも実践的にも重要な検討課題である。1990年代以降英語圏の質的研究においては、この問題をめぐる検討と議論が進み、従来の「信頼性」・「妥当性」・「一般化可能性」に代わる種々の規準が提案・適用されるようになった——クヴェールのいう「コミュニケーション的でプラグマティックな妥当性」もそのひとつである——が<sup>(23)</sup>、日本においては表立った議論や提案はきわめて少ないのが現状である<sup>(24)</sup>。その一方で、日本でも質的インタビューを含めて質的研究法による調査実践は増大している。そして、学会や研究会での報告・討論、各種論文の査読や審査など、個々の調査研究に対して実際に評価が行われ、そこでは何らかの規準が作動しているはずであるが、それがその場面や当事者の範囲をこえて明示され議論されることはきわめて少ない。現代の質的研究では従来の評価規準が不適と考えられ、代替的規準の創出が求められているだけに、この現状は打破されなければならないであろう。

## 注

- (1) 本稿では、interview (ing) を「インタビュー」、interview research あるいは research interview (ing) を「インタビュー調査」と表す。従来これらの語は、「面接(法)」、「面接調査(法)」、「調査的面接(法)」などと訳されることが多かったが、ここでは後述する理由から採用しない。



- (2) 学術的なインタビュー調査以上に、現代社会では、政府や企業によるインタビュー調査、さらにはジャーナリズムの取材やエンターテインメントとしてもインタビューが盛んに行なわれ、まさに「インタビュー社会」(Holstein & Guburium 1995=2004: 15 [元々は、D. Silverman による表現])と呼ぶべき状況にある。
- (3) 例えば、クヴェールたちの *Inter Views* (Kvale 1996, Kvale & Brinkmann 2008) は、近年の欧米での達成をふまえて、質的インタビュー調査をめぐる理論上、方法上、実践上の諸問題を包括的系統的に論じた上で、「穏健なポストモダニズム」の立場から、あり得べき質的インタビュー調査の方向性を示した好著で、教えられるところが多い。本稿でも大いに参照した。グブリアムとホルスタインの編集による *Handbook of Interview Research* (Guburium & Holstein 2002) は、質的インタビュー調査を中心に、インタビュー調査の歴史から、インタビュー調査の種々の形態、応用分野、技法、表象の問題まで、一千頁に及ぶ包括的なハンドブックである。また、フィールドイングの編集による *Interviewing* (Fielding 2003) は、英語圏での半世紀に及ぶ研究の中から重要論文を集めた全4巻のリーディングスである。
- (4) 日本における質的研究の現状評価については、例えば、小田博志の評価(小田 2002: 353-359)を参照。質的インタビュー調査については、社会学や心理学の社会調査法や面接調査法のテキストの一部として概説されることは多いが、これを主題的に取り扱った著作はきわめて少ない。桜井厚『インタビューの社会学』(桜井 2002)は、例外的に、「対話的構築主義」の立場から、ライフストーリー調査におけるインタビューの諸問題を本格的に論じている貴重な仕事である。その後桜井はライフストーリー・インタビューの入門書(桜井・小林 2005)も編集している。また、近年、欧米の質的研究のテキストブック類はかなり翻訳・紹介されるようになったが、質的インタビュー論については、ホルスタインとグブリアムの *The Active Interview* (Holstein & Guburium 1995=2004) が山田富秋たちによって最近翻訳された以外は皆無である。
- (5) 筆者自身のインタビュー調査の方法的反省を伊藤(2001a)で試みた。本稿はこれを踏まえつつ、前進を図ろうとするものである。
- (6) この他に、標準化インタビュー／非標準化インタビュー、フォーマル・インタビュー／インフォーマル・インタビューなど、類似するが若干意味が異なる類型論がある。
- (7) 質的研究では非構造化インタビューが主流だという見解(盛山 2004)もあるが、実際最も活用されているのは、質問項目や質問の仕方をかなり統一した上で回答を自由回答形式で聞き出す半構造化インタビューである。なお、こうした3類型は一般的ではあるが、「半構造化／非構造化」という表現には問題もある。つまり、この表現には、構造化されている方が望ましい・優れているという含意があり、ひるがえって、質的インタビュー調査では、研究目的・研究設問が不明確になっているという偏見がある。しかし後述するように、質的インタビューでも、「構造」(目的、問い)は明確でなければならない(Fielding 2003)。
- (8) 例えば、鈴木敦子の『調査の面接の技法』(鈴木 2005)は、各技法の概要、ガイドライン、研究例などが解説され、有用性の高いテキストブックである。
- (9) 本節の内容は、伊藤(2002, 2007)の一部を要約的に再述している。本稿はシンボリック相互行為論に依拠したが、もちろん、意味の問題も質的インタビューもシンボリック相互行為論の専売特許ではなく、別の理論・概念による説明や位置づけを排除するものでは決してない。なお、シンボリック相互行為論について詳しくは船津・宝月(1995)を参照のこと。
- (10) 一例として、『新社会学辞典』(森岡ほか, 1993)の記述を引こう。「面接法【interview method】直接対象者と面接してデータを収集する社会調査の方法。調査票(質問票)を用いて一定の質問構成に従って進める指示的面接と、被面接者の状況や反応に応じて質問内容や質問順序を臨機応変に変えて進める非指示的面接がある。……いずれの場合も被面接者(調査対象者)との間に友好的な関係(ラポール)を成立させ、スムーズに回答を引き出すことが必要である」(執筆・尾嶋史章)。「聴き取り調査【hearing】非指示的面接法(または自由面接法)のひとつで、被調査者に関する事実、あるいは彼の属する地域社会・集団に関する事実を面

接によって聞きだし、被調査者の口述をそのまま記録する方法……収集されたデータの客観性に乏しいという欠点をもつ)(執筆・野田隆)。

- (11) 心理学分野では、リサーチとしてのインタビューは「調査的面接」、カウンセリングとしてのインタビューは「相談的面接」と表現されることが多い。
- (12) 最近では「インタビュー」と訳す例も増えてきている。例えば、グレイザー&ストラウス『データ対話型理論』1996年刊、フリック『質的研究入門』2002年刊、ストラウス&コービン『質的研究の基礎』1999年刊、ロフランド&ロフランド『社会状況の分析』1997年刊など。これに応じて、邦語で書かれた論文や記事においても「インタビュー調査」という表現が増大している。
- (13) 例えば、「匿名性をおびたコラージュ」「虚構」としてのインタビューを指摘する永江朗『インタビュー術！』（永江 2002）は質的インタビュー調査の実践にとっても大いに参考になる。また、インタビュー論ではないが、近代ジャーナリズムの問題を「無署名性の言語」という視点から批判する玉木明『言語としてのニュー・ジャーナリズム』（玉木 1992）は、質的インタビュー調査論における実証主義批判と通底する議論を展開して興味深い。
- (14) クヴェールによれば、採鉱モデルでは、「知識は埋蔵鉱脈のようなものとして、インタビュアーは貴重な鉱石を掘り出す鉱夫のようなものとして理解される。数量化可能な客観的事実という鉱石を探し求める者もいれば、本質的な意味という鉱石を探し求める者もいるが、いずれの場合でも、知識は、採鉱者＝インタビュアーの影響を被ることなく、対象者の内部にあって発見されるのを待っているものと考えられる。インタビュアーは、データなり意味を、誘導質問でゆがめることなく、対象者の純粋な経験の中から掘り出すのである。インタビュアーは、調査者として、意識的経験を明るみにだしたり、あるいは、心理療法家として、深層の無意識を掘り出したりするというわけだ。貴重な事実や意味は、口頭で述べられたことを文字に書き写すことで純化される。口頭の段階から文字の段階へとコンペアー・ベルトの上を移動し、その外見が変わっても、知識という鉱石自体の性質に変化はない。分析において、客観的事実や本質の意味は、様々な技法を用いて引き伸ばされ、最終的には鋳型に流し込まれる。出来上がった知識の延べ棒の価値や純度は、それらと、客観的で外的な現実世界や主観的で内的で真の経験との相関性によって決定される。」(Kvale 1996: 3-4)
- (15) クヴェールはこのモデルを「旅人」のメタファーを用いて次のように説明している。「旅人のメタファーでは、インタビュアーは、家に持ち帰って他人に聞かせる物語を求めて旅に出る旅人と理解される。旅人であるインタビュアーは、土地土地を歩き回り、出会った人びとと話をする。旅人は、国中を縦横に歩き回り、地図に載っている場所や未知の場所など多くの土地を踏破する。旅人は、場合によっては、方法 (method) に従って特定の場所や話題を意図的に探査することもある(「方法」とは、ギリシア語の語源では「目的地に至る道」を意味する)。インタビュアーは、地元の住民とともに土地を歩き回り、かれらを促してかれら自身の生きられた世界の物語を語ってもらう、つまり、かれらと会話を交わすのである(「会話」とは、ラテン語の語源では「ともに歩き回ることを意味する)。……報告者である旅人が見聞きしたことは質的な形で記述され、インタビュアーが属する国の人びとに向けて(場合によっては、旅した土地の人びとに向けても)語られる物語として再構成される。元々の物語の意味は、旅人の解釈によって様々な差異や展開を示す。つまり、元々の物語は、新しい語りの型に鋳直されるのだ。新しい語りの型は、美的な形式の点で説得力をもっていたり、聞き手に対するインパクトの大きさによって効果的であったりする。……採鉱者と旅人という2つのメタファーは、知識の形成に関する異なる考え方も示している。それぞれは、異なるジャンルと異なるゲーム規則を表している。採鉱者のメタファーは、大まかに言って、所与のものとしての知識という近代社会科学の共通理解を表している。旅人のメタファーは、一種のポストモダンで構築的な知識理解を表している。……採鉱者のメタファーでは、インタビューは人間工学に近いところに位置づけられるのに対して、旅

人のメタファーではインタビューは人文学や芸術に近いところに位置づけられるのである。](Kvale 1996:4-5)

- (16) この点では、ジャーナリストやマーケティングのプロなどによるインタビュー論（例えば、永江 2002, 上野 2004など）には学ぶべき点が多い。
- (17) この点に関連して、佐藤郁哉の「漸次的構造化法」というフィールドワークの特徴づけが想起される。佐藤は、フィールドワークの顕著な特徴として、データ収集、データ分析、問題の構造化という3種類の作業が同時並行的に進行する点を指摘している（佐藤 2002:188-193）。
- (18) 「意味縮約」とは、対象者の発言の意味を簡略化して表現するやり方のひとつで、データを数量化せず、日常言語によって表現されたままの状態で、体系的に扱う方法である。通常、①インタビュー記録の全体を通読してその意味を理解した上で、②回答の「自然な単位」を区分し、③その単位ごとの中心的テーマを簡略化して記述する。そして、④意味の単位を研究目的に応じて詳しく検討し、⑤インタビュー全体の本質的なテーマと記述的説明を結びつける、というステップを踏む。「意味カテゴリー化」とは、対象者の発言内容をいくつかのカテゴリーにコード化するやり方で、土のような度合いや、1-5のようなスケールを用いて、図表化されることも多い。内容分析に典型的に見られるこうしたカテゴリー化は、事実の数量化を重視する実証主義と親和性がある。「ナラティブによる意味構造化」とは、インタビュー記録を物語として捉え、その構造やプロットを明らかにする方法である。意味縮約と同様に、対象者が用いる日常言語によるインタビューの語りを、物語としての再構成する分析法である。「意味解釈」とは、テキストの表面的明示の意味の構造化からさらに進んで、テキストについてのより深い反省的な解釈を行う方法を総称する。意味縮約やカテゴリー化が発言をその文脈から切り離し分析・解釈する脱文脈化傾向が強いのと対照的に、映画や演劇の評論、夢についての精神分析的解釈などのように、対象者の発言を、より広い準拠枠の下に再文脈化する分析であり、解釈学という「意味のより詳細かつ深い解釈」に近い。額面どおりに発言を読まず、精神分析やマルクス主義などのように、直接表現されたものの背後にある意味（無意識の力の現れ、社会的経済的諸力の基本矛盾を覆い隠すイデオロギーの表明）を読み取ろうとする傾向が強い。最後に「アドホック・メソッド」とは、インタビュー分析の一般的な各種の方法や、内容分析などの量的方法、さらには文学のテキスト分析の手法など、各種方法を調査目的・分析目的に応じて組み合わせて、資料の様々な部分の意味を解明しようとする折衷的アプローチを意味する。（以上、Kvale 1996:187-209）なお、日本においては従来、インタビュー記録を含む質的データの分析法については、KJ法に関する川喜田二郎の一連の著作の他は、グラウンデッド・セオリーの翻訳書などしか参照できない状態にあった。しかし最近になって、グラウンデッド・セオリーに基づく具体的分析法（例：木下 2003, 才木 2006）、大谷尚の提唱するSCAT（大谷 2007）、佐藤郁哉の『質的データ分析法』（佐藤 2008）など、インタビュー記録の分析にも適した実践的で優れた邦語の分析指南書が著され、事態はかなり改善されつつある。
- (19) 質的研究における「表象の危機」について詳しくはDenzin & Lincoln (2000)、邦語では伊藤 (2001b)を参照。
- (20) 「いかに良く書くか」については、リチャードソン (Richardson 2000) の提案が示唆的である。リチャードソンは、社会科学におけるナラティブ・ターンや文学的転回から生じた著述や解釈の新しいスタイルとして、「CAP エスノグラフィー (Creative Analytic Practices Ethnography)」と呼ぶスタイルを提案している。
- (21) ①特定の引用は、調査者の理論的モデルや、対象者の世界の枠組みなど、理解の準拠枠を与えた上で行うこと、②引用の文脈（発言の文脈）を明示すること、③引用は、必ず調査者の解釈を加え、読者に委ねてはいけない。さらに、④引用と本文のバランスを考慮し、⑤引用は短く、長くても半頁までとし、より長いときは、コメントや解釈を挿入すること（ただし、生き生きとした語りの提示そのものが目的の場合は例外）、⑥最善の引用を使うこと（同じような内容なら、詳しく、分かりやすい、豊かなものをひとつ選ぶこと）、⑦

発言は、原則として、文章体（書き言葉）に書き換え、読者に分かるようにすること（目的によっては例外あり）、⑧編集過程を明示する（引用をどう編集したかがひと目でわかる表記法を用いること）。（Kvale 1996：266-267）

- (22) 見直しの結果、例えば、調査される一方であった「調査対象者 (research subject)」が、なんらかの仕方・程度で調査に積極的に関わる「調査参加者 (research participant)」へと立場・役割・呼称が変化することになる。
- (23) デンジンとリンカン (Denzin & Lincoln 2000) によれば、代替的規準として提案・適用されている規準としては、従来の実証主義的規準と対応させて整理すると、信頼性に対する「確実性 (dependability)」, 妥当性に対する「信用性 (trustworthiness)」や「真実性 (authenticity)」, 一般化可能性に対する「転用可能性 (transferability)」などがある。この問題については他に、Flick (1995), Smith & Deemer (2000), Willig (2001) などを参照。
- (24) とはいえ、能智 (2005) のように、伝統的基準（信頼性と妥当性）を超えて、質的（心理学）研究を評価する視点や基準について考察を展開する貴重な論考も存在する。

## 文 献

- Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房。)
- Davies, C.A., 1999, *Reflexive Ethnography*, London: Routledge.
- Denzin, N. K., 1989a, *The Research Act* (3rd Edition), Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- , 1989b, *Interpretive Interactionism*, Newbury Park, CA: Sage. (=1992, 片桐雅隆ほか訳『エビファニーの社会学——解釈的相互作用論の核心』マグローヒル。)
- , 1992, *Symbolic Interactionism and Cultural Studies: The Politics of Interpretation*, Cambridge, MA: Blackwell.
- Denzin, N. K., and Y. S. Lincoln (eds.), 2000, *Handbook of Qualitative Research* (2nd edition), Thousand Oaks, CA: Sage. (=2006, 平山満義監訳『質的研究ハンドブック』全3巻, 北大路書房。)
- , 2005, *The SAGE Handbook of Qualitative Research* (3rd Edition), Thousand Oaks, CA: Sage.
- Fielding, N., (ed.), 2003, *Interviewing*, 4 vols., Thousand Oaks, CA: Sage.
- , 2003, "Editor's Introduction: Hearing the Social," in Fielding (ed.), *Interviewing*, vol.1, Thousand Oaks, CA: Sage, pp.ix-xxiii.
- Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung*, Hamburg: Rowohlt. (=2002, 小田博志ほか訳『質的研究入門——<人間の科学>のための方法論』春秋社。)
- Fontana, A., and J.H. Frey, 2000, "The Interview: From Structured Questions to Negotiated Text," in Denzin & Lincoln (eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd edition), pp.645-672.
- , 2005, "The Interview: From Neutral Stance to Political Involvement," in Denzin & Lincoln (eds.), *Handbook of Qualitative Research* (3rd edition), pp.695-728.
- Fontana, A. and A. H. Prokos, 2007, *The Interview: From Formal to Postmodern*, Walnut Creek, CA: Left Coast Press.
- 船津 衛・宝月 誠 (編), 1995, 『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣。
- Gubrium, J.F., and J.A. Holstein (eds.), 2002, *Handbook of Interview Research: Context and Method*, Thousand Oaks, CA: Sage.

- Holstein, J.A., and J.F. Gubrium, 1995, *The Active Interview*, Thousand Oaks, CA: Sage. (=2004, 山田富秋ほか訳『アクティヴ・インタビュー』せりか書房。)
- 宝月 誠, 1984, 「シンボリック相互作用論」, 新睦人・中野秀一郎 (編)『社会学のあゆみパートII』有斐閣, 83-108頁。
- 伊藤 勇, 2001a, 「インタビューの限界と可能性——庄内調査の経験に即して」『社会学年報』第30号, 東北社会学会, 19-37頁。
- , 2001b, 「シンボリック相互作用論における質的研究論争——ポストモダン派と相互作用論派の応酬」, 船津衛 (編)『アメリカ社会学の潮流』恒星社厚生閣, 171-188頁。
- , 2002, 「意味を生き相互行為する人びとの探究——シンボリック相互作用論の視角と方法」, 伊藤勇・徳川直人 (編)『相互行為の社会心理学』北樹出版, 23-45頁。
- , 2007, 「シンボリック相互行為論の生かし方をめぐって——N. K. デンジンの批判的評価から」『社会学研究』第82号, 東北社会学研究会, 55-76頁。
- 木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂。
- Kvale, S., 1996, *Inter Views: An Introduction to Qualitative Research Interviewing*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- , 2007, *Doing Interviews*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- Kvale, S., and S. Brinkmann, 2008, *Inter Views: Learning the Craft of Qualitative Research Interviewing (2nd Edition)*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- Lincoln, Y. S., and E. G. Guba, 1985, *Naturalistic Inquiry*, Newbury Park, CA: Sage.
- 森岡清美ほか (編), 1993, 『新社会学辞典』有斐閣。
- 永江 朗, 2002, 『インタビュー術!』講談社。
- 能智正博, 2005, 「質的研究の質」, 伊藤哲司・能智正博・田中共子 (編)『動きながら識る, 関わりながら考える——心理学における質的研究の実践』ナカニシヤ出版, 155-166頁。
- 小田博志, 2002, 「解説」, フリック『質的研究入門』春秋社, 349-360頁。
- 大谷 尚, 2007, 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案——着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」, 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』(教育科学), 第54巻第2号, 27-44頁。
- Richardson, 2000, "Writing: A Method of Inquiry," in Denzin & Lincoln (eds.), *Handbook of Qualitative Research (2nd edition)*, pp.923-948. (=2006, 徳川直人訳「書く: ひとつの探究方法」, 『質的研究ハンドブック 3巻——質的研究資料の収集と解釈』北大路書房, 315-342頁。)
- オムクレイグヒル滋子, 2006, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——理論を生みだすまで』新曜社。
- 桜井 厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 桜井厚・小林多寿子 (編), 2005, 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房。
- 佐藤郁哉, 2002, 『フィールドワークの技法』新曜社。
- , 2008, 『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社。
- Schwandt, T. A., 2007, *The SAGE Dictionary of Qualitative Inquiry (3rd edition)*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- 盛山和夫, 2004, 『社会調査入門』有斐閣。
- Shibutani, T., 1966, *Improvised News: A Sociological Study of Rumor*, Bobbs-Merrill. (=1985, 広井脩・橋元良明・後藤将之訳『流言と社会』東京創元社。)
- Smith, J. K., and D. K. Deemer, 2000, "The Problem of Criteria in the Age of Relativism," in Denzin & Lincoln (eds.), *Handbook of Qualitative Research (2nd edition)*, pp.877-896. (=2006, 山尾貴則・徳川直人訳「相対主義時代における規準の問題」, 『質的研究ハンドブック 3巻——質的研究資料の収集と解釈』北大路書房, 269-289頁。)

- 鈴木淳子, 2005, 『調査的面接の技法【第2版】』ナカニシヤ出版。
- 玉木 明, 1992, 『言語としてのニュー・ジャーナリズム』学藝書林。
- 上野啓子, 2004, 『マーケティング・インタビュー——問題解決のヒントを「聞き出す」技術』東洋経済新報社。
- Willig, C., 2001, *Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method*, Buckingham: Open University Press. (=2003, 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至訳『心理学のための質的研究法入門——創造的な探求に向けて』培風館。)

[付記] 本稿は、科学研究費補助金（課題番号15530324および18530375）による研究成果の一部である。